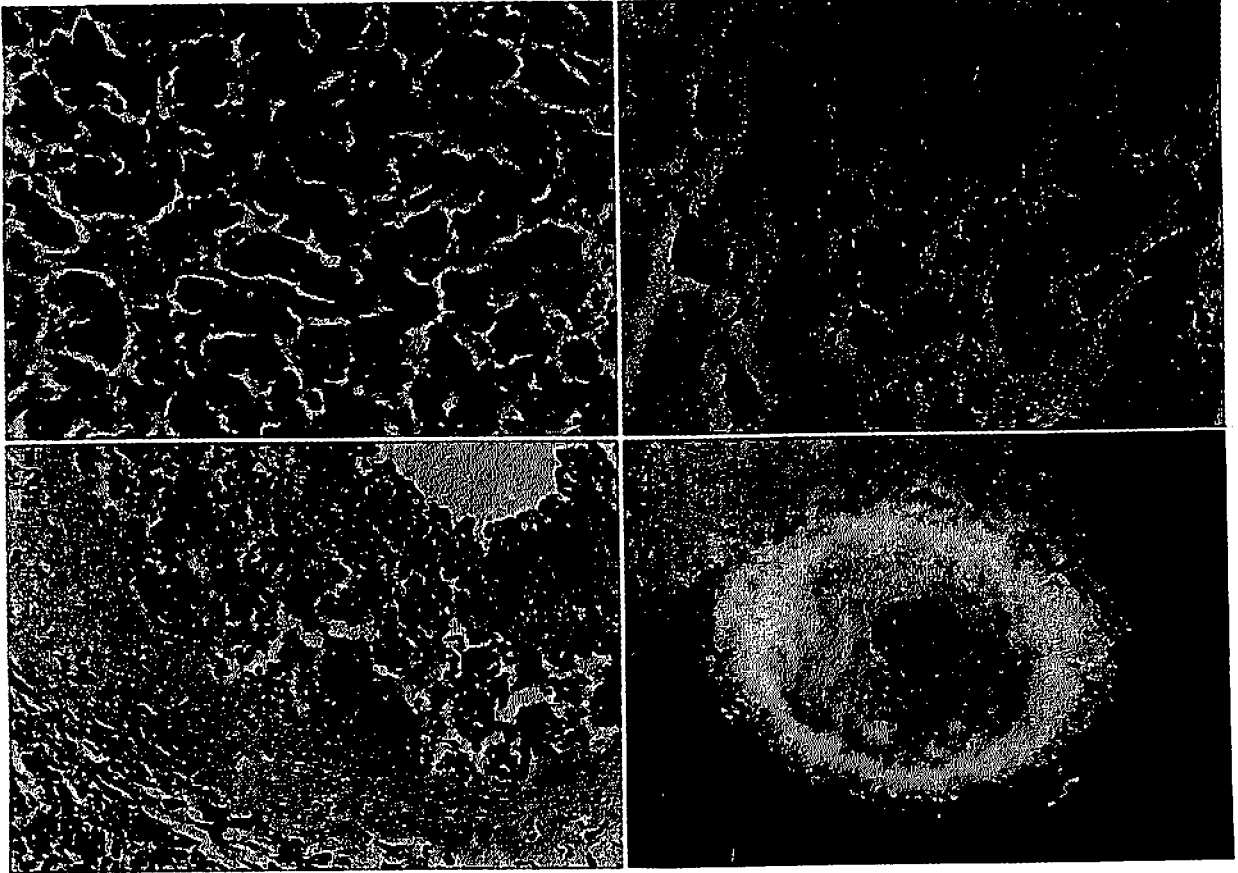


クジャク肝の色素沈着と固有肝動脈のアミロイド沈着

日本大学農獣医学部家畜病理学教室出題 第18回獣医病理学研修会標本No.290



臨床的事項（病歴）、このクジャクは東京都内井之頭公園で飼育されていた。6ヶ月齢の時コクシジウムの治療を行なっている。飼料は日本配合飼料KKの配合飼料とコマツナを与えていた。最初発見したのは昭和52年8月下旬で、剖検約1週間前の朝であった。症状は起立・歩行不能で片足を伸ばして、うずくまっていた。食欲は普通で下痢を伴っていた。治療はビタミン剤の注射を行なっただけで、その他特別な処置はしなかった。

剖検所見：栄養状態不良、心冠部脂肪膠様萎縮、心膜液増量、脾臓萎縮、肝臓暗赤褐色を呈し、灰白色斑点散発、胆嚢は胆汁を充満、腺胃は慢性カタル性炎、十二指腸は肥厚・充血、盲腸は多量の内容物を充満、直腸内には結石（25.25mm×18.70mm）があり、直腸壁は肥厚（充血・浮腫）し漿膜面には線維素凝塊を付着し、骨盤腔内に少量の腹水を貯留していた。

病理組織学的所見：肝臓は、間質にリンパ球の浸潤が中等度に巣状に処々に認められ、黄褐色色素の沈着が著明である。この色素は肝細胞とクッパー細胞の両者に認められ、特にクッパー細胞の活性化が顕著で赤血球を貪食している。そしてクッパー細胞内の色素はベルリン脊で大部分陽性反応を呈し、肝細胞内のはごく少量が陽性を示した。しかしズダンⅢにより、ベルリン脊陰性のは陽性を呈し、また紫外線で褐色蛍光を発した。

一方比較的太い肝動脈（固有肝動脈）の壁内（中膜～

外膜）に出血があり、また同部位には硝子様物質の著明な沈着もある。この物質はコンゴ赤に好染し、蛍光顕微鏡でオレンジ色の蛍光を、またチオフラビンTで白色蛍光を発した。その他トルイジン脊染色で微弱なメタクロマジア、PAS染色陽性、ワンギーソン染色でカーキ色などを呈した。したがってこの硝子様物質はアミロイドと判定した。

その他臓器における血管病変は腎において明瞭で、腎門部から小葉間の動脈に至る動脈系の中膜から外膜部に硝子様物質の沈着と出血があり、肝の動脈におけると同様の検索を行なったところ、同様にアミロイドと判定された。また心、脾・膵および消化管に分布する動脈の壁は浮腫性膨化～肥厚が認められた。しかしアミロイド沈着と出血は認められなかった。

以上であるが、提出標本の肝臓について、沈着色素は上記所見からヘモジデリンとセロイド色素と診断される。固有肝動脈についてはアミロイド沈着を起こし、弾力性が減少し、壁全層の収縮に不調和が生じ剥離性となり出血～血腫の変状を呈したものと考える。

組織学的診断：クジャク肝の黄色色素沈着と固有肝動脈壁内出血を伴ったアミロイド沈着。

写真説明：1) 肝臓、HE染色、×200 2) 肝臓、ベルリン脊染色、×400 3) 固有肝動脈、HE染色、×200 4) 固有肝動脈、コンゴ赤染色蛍光法、×40